

災害の記憶を想起させる装置としての
原状記録と現物資料の研究

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2018 年 3 月

川浦 瑞花

本文目次

第1章	はじめに	4
第1節	研究背景.....	4
第2節	先行事例・研究目的	7
第3節	研究方法.....	8
第2章	生み出された資料.....	9
第1節	資料の発生と保全の経緯.....	9
第2節	旧騎西高校と保全された資料.....	10
第3章	原状記録としての写真	12
第1節	現状写真を原状記録として	12
第2節	掲示物の内容分類.....	13
第3節	写真を用いた分析と考察.....	14
第4節	小括.....	15
第4章	現物資料としての千羽鶴.....	17
第1節	保全された千羽鶴.....	17
第2節	項目による千羽鶴の分析と考察.....	18
第3節	出所による千羽鶴の分析と考察.....	21
第4節	小括.....	22
第5章	記録と場所	23
第1節	結論.....	23
第2節	展望.....	23
図表	25
参考文献	51

図表目次

図 1	記憶と記録、記憶資料の関係図.....	25
図 2	双葉町の避難経緯	25
図 3	2階 平面図	27
図 4	2階 エリア分類	31
図 5	記録から記憶資料への変換..... エラー! ブックマークが定義されていません。	

表 1	旧埼玉県立騎西高校校舎の部屋や機能.....	26
表 2	データ項目	30
表 3	各エリアにおける掲示物の内容.....	32
表 4	内容分類と掲示物の内容	34
表 5	各エリアにおける掲示物の点数と種類.....	36
表 6	材質による千羽鶴の分類	48
表 7	作成地による千羽鶴の分類.....	49
表 8	千羽鶴の出所と点数.....	49
表 9	千羽鶴の出所と作成地	50

写真 1	旧埼玉県立騎西高校 校舎	26
写真 2	2階 西側廊下	28
写真 3	2階 西側掲示板	28
写真 4	2階 西側掲示板ポスター.....	29
写真 5	2階 南側廊下	29
写真 6	2階 西側防火扉周辺	30
写真 7	イベント情報の掲示物	33
写真 8	校舎案内の掲示物（校舎平面図）	37
写真 9	2階 玄関 外観	38
写真 10	2階 玄関 入口	38
写真 11	2階 玄関 入ってすぐ左手	39
写真 12	外来者向けの掲示物.....	39
写真 13	2階 玄関－秘書広報課 廊下の壁 1	40
写真 14	2階 玄関－秘書広報課 廊下の壁 2	40
写真 15	2階 進路資料室 廊下	41
写真 16	2階 西側 住宅情報	41
写真 17	2階 東側 広報	42
写真 18	2階 東側 相談窓口案内.....	42
写真 19	寄せ書きで隠れている掲示物	43

写真 20	段ボールで隠れている掲示物	43
写真 21	ごみ箱とその周辺	44
写真 22	施設使用方法「流し場の扱い方について」	44
写真 23	千羽鶴	45
写真 24	上にメッセージのある千羽鶴	45
写真 25	下にメッセージのある千羽鶴	46
写真 26	鶴の羽にメッセージのある千羽鶴	46
写真 27	千羽鶴の原状記録写真	47
写真 28	折り紙でない紙で折られた千羽鶴	47
写真 29	折り紙でない紙で折られた千羽鶴 拡大	48

第1章 はじめに

第1節 研究背景

災害の記憶と記録を保存する活動が災害被災地で大々的に始まったのは、1995年1月17日の兵庫県南部地震が発生した直後からであった。後に阪神・淡路大震災と呼ばれたこの震災は、ボランティア活動が初めて活発に行われたということもあり、ボランティア元年とも呼ばれた。そのようなボランティア活動の内容を記した記録を保存しておこうという動きが起き、被災地におけるさまざまな活動主体によって始まったのである。¹

上記から始まり 2004年10月23日の新潟県中越地震の頃までにおける震災資料を保存する試みは、被災地やその周辺によるものであった。それが2011年3月11日に発生した「東日本大震災以後、震災の記録を保存し、後世へと伝えようとする取り組みが、国内外で広く行われ」²るようになった。

筆者は、災害の発生に伴って生まれるものに大きく記憶と記録の2つがある点を重視している。記憶は当事者が経験、或いは第三者が見聞きしたことである。その種類には、災害当時における当事者の記憶や第三者の記憶、後世へ継承された記憶、また多くの人々に共通の経験や歴史として共有された、いわゆる集合的記憶などがある。一方記録は文書や写真などの作成されたものを指す。災害の発生やその状況を伝えるものであったり、災害対応やボランティア団体の活動、その他支援活動の内容が書かれたものであったりする。他にも避難所の運営マニュアルや、実際に避難所で使用されていたもの、復旧・復興の過程で作成されたものなども含まれる。行政・団体・個人などといった作成者の規模や形態に関わらず、災害発生に伴って作成されたあらゆるものが記録である。

記録には記憶を想起するきっかけとなる可能性がある。というのも、印刷技術の発展により本が作られるようになったとき、「本は人間の記憶を補助するものとして用いられ」³ていた。補助について、具体的には「読者に記憶を供給したり、想起の引き金」⁴として働いていたということである。

しかしながら筆者は、災害における記録について上記を成り立たせることが困難であると考えている。何故なら、災害のような緊急時に生まれる記録というのは、作成した本人や利用者など一部の人にしかその内容や意味を理解できない可能性があるためである。いわゆる本のように、大勢の人が読むことを想定して作られる記録とは全く異なるものであると言える。

人が記録を見た際に、それについて理解や解釈ができなければ記憶には作用しない。そこで、記録に対して適切な情報を付加することで、人が理解や解釈をできる記録に変換できると考えられる。ここでは、情報を付加する形で変換した記録（人が理解や解釈をできる記録）

1 佐々木, 2013, p. 209-210.

2 川内, 2014, p.377.

3 ホワイトヘッド, 三村訳, 2017, p. 61.

4 ホワイトヘッド, 三村訳, 2017, p. 61.

のことを「記憶資料」と呼ぶこととする。

この「記憶資料」という言葉は、管見の限りで使用された例の見られない言葉であった。しかしながら、記録を変換したものというのは、人の理解や解釈のために使用される材料となり得るものである。このことから、書き記されたものという意味の「記録」よりも研究などに使用される材料や、もともと使うものといった意味のある「資料」という言葉の方が適切であると判断した。さらに筆者は、前述した記録たる本の役割において、「想起の引き金」という点に着目した。つまり、「記録」から変換した「資料」というのは「記憶に作用する資料」であり、特に「記憶の想起のために使う材料としての資料」であると考えた。以上を踏まえて、あえて「記憶」と「資料」の2語を繋げて「記憶資料」という表現をすることとした。

こうして記録から変換された記憶資料を用いることで、記憶を想起するきっかけとなり得る。また、記憶から改めて記録や記憶資料が作成されたり、記憶と記憶資料を併せることで災害を理解したりといったように、それぞれは互いに影響し合う。この相互作用の様子を図1に示す。

では、記録に付加するにあたり適した情報とは何なのであろうか。記憶資料を作り出すためには、まず記録に適した情報を付加する必要がある。だが、それがどういった情報であれば良いかがわからなければ、記憶資料への変換ができない。よって、記録に適した情報の正体を突き止め、記録から記憶資料へ変換するために記録分析が必要となってくる。ここで、記録分析の必要性に関する主張を取り上げたい。

例えば水本が、避難所において発生していた問題に関する資料に着目して記録分析の必要性を説いている。阪神・淡路大震災の折に避難所にて避難者を悩ませたトイレの問題は、当時の問題対応の記録が保存されているにも関わらず東日本大震災でも同様に避難所避難者を悩ませることとなった。残され蓄積された記録が、残されるだけに留まり、正しく活用できていないために問題を繰り返している、というのである。災害の記録は死蔵するのではなく、「早急な分析を行い、阪神・淡路大震災の「教訓」と東日本大震災の「教訓」を共有化する方策を検討すべき」⁵だと主張している。

一方で川内は、災害の記録を扱う専門家がいないうことと、記録分析の方法論が確立されていないことに問題意識を示している。東日本大震災以後は、記録があらゆる人々の手によって保全されてきた。被災した自治体の中には、「震災の悲惨な体験・記憶の風化を防ぎ、そのことを地域の防災意識につなげるために震災資料の活用がなされることが期待」⁶できるとして記録の保存に積極的な姿勢を示しているところもある。（ここで、震災資料とは、災害の記録の中でも特に地震災害における記録を示す呼称である。）一方で、「それにはとどまらない多様な「可能性」が震災資料には含まれて」⁷おり、「その活用の方法についても

5 水本, 2012, p. 6.

6 川内, 2014, p.377.

7 川内, 2014, p.378.

また、多様なものがある」⁸とも指摘している。しかしながら、そのように多様な可能性を秘めている災害の記録が満足に活用されていない点について、「震災資料そのものを取り扱うアーキビストないしは方法論の不在」⁹が原因であると指摘している。十分な研究報告がされていないだけでなく、そもそも災害の記録を扱う専門家がいない。こうした現状を受けて川内は、震災の記憶を風化させずに後世へと継承するために、今後、震災資料をいかに活用していくかといった方法論を鍛え、確立していく必要があると述べている。¹⁰

以上のように、記録分析ならびにその方法論確立の重要性と必要性が唱えられているにも関わらず、十分な実践例は未だ無い。

ここで、被災者にとっての記録が持つ意味というものを考えたい。前述の通り保存のみならず研究が必要とされる災害の記録だが、それは災害研究を行う研究者のためのものであったり、災害を歴史として語り継いでいく後世の人のためのものであったりする。用途も利用者も多岐にわたるであろう記録だが、筆者はこれを、被災者のためにあるとも言えるのではないかと考えている。

福島県双葉町が策定した、東日本大震災における復興計画書のあるページには、被災の経験に関して町民の意見が記されている。その中には『忘れられる』ということが一番悲しい。」「特異な生活環境に置かれている現実を記録することは自身の貴重な記録となり、この時代に生きた証となる。」¹¹とある。つまり、被災した町民の中には、自分たちが発災当時に生きていた証として、他の人から忘れられないためにも、災害の記録を残してほしいと望む人がいるのである。

ある生涯学習講座にて、旧騎西高校避難所（詳細は第2章を参照）で生活していた双葉町民の方々が、避難所から保全した資料を見学した。¹²その際、それら資料を通して当時のことを思い出し、思い出として語り合いながら懐かしむ姿が見られた。記録は被災者にとり、思い出の品となり得る可能性を持っていると言える。

災害当事者の中には、災害を思い出したくない人もいるだろう。しかし、思い出すことを苦痛に感じていた当事者でも、年月の経過により災害と向き合えるようになることがある。例えば、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターに災害の記録を寄贈する人の中には、「(震災から10年以上が経過した) 今だから資料を寄贈できた」¹³という例もあるという。また神戸大学附属図書館震災文庫の活動報告においても、「資料寄贈時などにも聞かれる言葉だが、『5年間位はまともに見れませんでした、最近になって普通に見れる様になりました』というものもあり、時間を経ての提供にもそれなりの意味がある。」¹⁴と語られてい

8 川内, 2014, p. 380.

9 川内, 2014, p. 380.

10 川内, 2014, p. 380.

11 双葉町, 2013, p. 74.

12 2016年11月30日、双葉町生涯学習事業「ふたば・かぞ生活学級 震災とふたば」、双葉町民が筑波大学春日エリアで保管している震災資料を見学

13 高野, 2009, p. 116.

14 渡邊, 2005, p. 3.

る。

時の経過により当事者が災害と向き合えるようになり、災害当時のことを振り返ろうとしたとき、必要になるのが記憶資料である。時間経過や伝達の過程において変容し易い記憶¹⁵だけで災害を語ろうとすれば、記憶と事実との間で歪が生じることとなる。だがそこに記憶資料があれば、それを元に記憶を想起することができる。

以上のように、記録を「自分たちが生きた証」として見る被災者や、被災者のみならず、災害と向き合おうとする当事者のために災害の記録があるとも言える。だからこそ、記憶資料を必要とする当事者が記憶資料を利用できるように、記録分析と、その方法論の確立が肝要なのである。

第2節 先行事例・研究目的

● 神戸の例¹⁶

阪神・淡路大震災において、神戸大学附属図書館は早い時期から震災資料を収集・公開しており、震災資料の収集においては先駆け的存在である。資料の利用を第一として今現在も震災文庫として活動が続けている。しかし主題による分類を行っているため、資料が作成された当時の場所や元の状態などについては情報が無く、不明である。

● 長岡の例¹⁷

新潟県中越地震で資料収集を行った長岡市立中央図書館文書資料室は、その経験と反省を東日本大震災での収集活動に活かした。東日本大震災において長岡市では福島県南相馬市とその他の地域からの避難者を受け入れており、そのために 21 か所の避難所が開設されていた。文書資料室ではその内の 8 か所の避難所で資料を保全し、且つ保全作業の一環として一部の避難所の写真も撮影している。写真を撮影したのは、「避難所開設時に史料収集・写真撮影に取り組むことが不十分だった中越大震災時の反省」¹⁸であると述べられている。

避難所の写真と保全した資料、そして元避難所職員への聞き取り調査から、避難所運営における工夫などの分析も行っている。しかしこれはあくまでも運営の視点としての分析となっている。

● 福島の例¹⁹

東日本大震災被災地としては福島県立博物館が震災資料に関する活動をしている。同館では、被災の経験を表す歴史資料として「震災が産み出した「モノ」や「バショ」、震災が

15 ホワイトヘッド, 三村訳, 2017, p. 58.

16 稲葉, 2005.

17 田中・田中, 2014.

18 田中・田中, 2014, p. 16.

19 ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会, 2017.

遺した「モノ」や「バシヨ」、復興の過程を示す「モノ」や「バシヨ」に着目」²⁰している。資料とそれが存在していた場所についての情報を合わせることで、被災の経験を「バシヨの記憶として把握すること」²¹を目指すなど、場所の情報を重視している。

以上に挙げたように震災資料に関わる活動が報告されている。しかし記憶と記録の関係や、注目され始めた記録と場所の関係に着目した研究は管見の限り見つからなかった。そこで本研究では、災害における原状記録と現物資料を用いて、記録と、その記録があった場所の関係性を明らかにすることを目的とする。このとき、原状記録とは記録の元々の場所や状態についての記録であり、現物資料とは記録そのものを指す。

第3節 研究方法

本研究の目的である記録と場所の関係性を明らかにするにあたり、当然ながら場所についての情報は必要不可欠である。また場所だけでなく、その場所に記録があった当時における記録の状態を調査することも、記録と場所の関係性を明らかにするために必要な手続きなのではないかと考えた。そこで、資料が存在していた場所・存在していたときの状況（その資料と周りの資料との関係性）・存在していたときの形状（資料の形態・形状）などといった、資料の元々の状態を尊重するアーカイブズの三原則を参考にすることとした。アーカイブズの三原則は以下の通りである。

出所原則 ：出所が異なる資料を混合してはならない。

原秩序尊重原則：資料相互の関連性や意味など資料に元々与えられている秩序を保存しなくてはならない。

原形保存原則 ：資料の原形（簿冊、束、折り方など）はできる限り変更してはならない。

これに則り、資料の元の状態を記録したものである原状記録と、資料そのものである現物資料を元にデータの作成及び分析を行った。原状記録については、資料が保全される前に撮影された写真と現場の平面図を照らし合わせながら、写真に写る資料1点1点につきデータを作成し、分析した。一方現物資料については、筆者が以前作成したデータ²²を用いて新たに分析を行った。詳細はそれぞれ第3章と第4章にて説明する。

20 ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会, 2017, p. 1.

21 ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会, 2017, p. 8.

22 ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会, 2017, p. 8.

第2章 生み出された資料

第1節 資料の発生と保全の経緯

本研究で扱う東日本大震災に関する資料について、それがどのような経緯で発生し、どのような経緯をもって保全されたものであるかを、関係年表²³を元に説明する。

福島県双葉郡双葉町は浜通り中部に位置する町であり、東北地方太平洋沖地震が発生した2011年3月11日現在での人口は6,830人であった。この日、町では震度6強を観測し、2,500人以上の町民が屋内避難のため町内の各避難所へ避難した。翌12日、双葉町の全町民に避難指示が下り、2,200人の町民が福島県伊達郡川俣町へ避難した。その後、福島第一原子力発電所（以下、福島原発）の1号機が爆発した。19日に1,200人の町民が埼玉県さいたま市中央区のさいたまスーパーアリーナへ避難し、30,31日には更に旧埼玉県立騎西高校の校舎へ移動した。4月1日、旧騎西高校校舎内に双葉町役場埼玉支所を設置し、役場機能と居住空間が一体となった校舎が誕生した。ここまでの避難経緯は図2の通りである。22日には政府が福島原発から半径20km圏内を警戒区域と設定した。これは双葉町の全域を含んでおり、町への立ち入りが制限されることとなった。

7月2日、茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク（以下、茨城史料ネット）が「東日本大震災で被災した文化財・歴史資料を救済・保全するため」²⁴設立された。12月12日に茨城県つくば市に「つくば連絡所」が設置され、2012年7月26日には双葉町生涯学習事業「郷土文化教室」第1回のために茨城史料ネットから講師が派遣された。10月15日、双葉町が役場機能をいわき市内へ移転することを発表した。11月1日、双葉町生涯学習事業「郷土文化教室」第2回のため、茨城史料ネットがつくば連絡所に講師を派遣した。12月11日に震災資料の救出・保全について双葉町教育委員会と筑波大学図書館情報メディア系が意見交換を行い、2013年4月1日には筑波大学が「復興・再生支援プログラム」として双葉町における震災資料の救出・保全事業を採択した。そのテーマは「東日本大震災被災地の記憶・記録の共有による地域コミュニティの再生のための情報基盤の構築」である。4月11日、双葉町役場埼玉支所が保有する震災資料の保全について、双葉町教育委員会と筑波大学が連携事業の開始を合意した。5月28日、双葉町の避難指示区域が再編され、町域の96%が帰還困難区域、残る4%が避難指示解除準備区域に設定された。

6月1日、「福島県双葉町教育委員会と筑波大学図書館情報メディア系との震災関係資料の保全及び調査研究に関する覚書」が締結され、連携事業が正式に開始された。8日に双葉町役場埼玉支所及び旧騎西高校避難所の現状写真撮影、10,11日には双葉町役場埼玉支所及び旧騎西高校避難所における震災資料の保全作業が行われた。ここで、撮影が行われた当時にとってこの写真は「今この時の状態」を撮影したものであるためあえて現状写真と表記しているが、本研究においては避難所の「元の状態」を知るための原状写真となる。

12～14日に双葉町役場埼玉支所の移転作業が行われ、17日には双葉町役場いわき事務所

23 白井, 2018 (予定) .

24 茨城史料ネット <http://ibarakishiryoku.web.fc2.com/> (2018-01-05).

が開所された。その後 25 日に『双葉町復興まちづくり計画』（第一次）が公表された。29,30 日の 2 日間で再び双葉町役場埼玉支所及び旧騎西高校避難所における震災資料の保全作業が行われた。保全された震災資料については 9 月 17 日に筑波大学春日エリアへ移送されるとともに、整理作業が開始された。2014 年 2 月 10 日、旧騎西高校避難所の閉鎖作業に伴い震災資料の保全作業が行われ、資料は筑波大学春日エリアへ移送された。3 月 27 日に旧騎西高校避難所が閉鎖され、施設は埼玉県へ返還された。

その後、6 月 29 日に双葉中学校、8 月 30 日に双葉北小学校・双葉町役場庁舎・鴻草公民館という日程で、双葉町内において避難所となっていた各施設の避難所跡調査と資料の保全作業が行われた。11 月 26 日、東日本大震災アーカイブ拠点施設の設置について双葉町長が福島県知事に要望を出した。2015 年 3 月 8 日、再び双葉中学校の避難所跡調査が行われた。4 月 15 日、福島県が「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設有識者会議」（以下、福島県有識者会議）を設置した。16 日、筑波大学が web サイト「福島県双葉町の東日本大震災関係資料を将来に残す」を開設した。9 月 10 日、福島県有識者会議が「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設の機能、内容等について（報告）」を提出。2016 年 4 月 15 日、筑波大学が web サイト「福島県双葉町の東日本大震災関係資料を将来に残す」の英語版を開設した。8 月 29 日、福島県が東日本大震災アーカイブ拠点施設を双葉町内に建設することを決定した。

9 月 17 日、ライフケア双葉の避難所跡調査が行われた。11 月 10 日、国立歴史民俗博物館・国立台湾歴史博物館が筑波大学に来訪し、震災資料の調査を行った。30 日に双葉町生涯学習事業「ふたば・かぞ生活学級 震災とふたば」が開催され、双葉町民が筑波大学春日エリアで保管している震災資料を見学した。12 月 20 日、『双葉町復興まちづくり計画』（第二次）が公表された。2017 年 3 月 27 日、福島県が「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設基本構想」を策定した。5 月 17 日に国立台湾歴史博物館が特別展示のため震災資料を借用し、6 月 27 日～12 月 3 日に開催された国立台湾歴史博物館特別展「地震帯上の共同体」にて双葉町の震災資料が展示された。

第2節 旧騎西高校と保全された資料

本研究では 2013 年 6 月に保全された、双葉町役場埼玉支所及び旧埼玉県立騎西高校避難所の資料と、同じく 6 月に撮影された現状写真を扱う。そこで、双葉町役場埼玉支所と旧騎西高校避難所について、旧騎西高校の校舎（写真 1）という観点からその概要について説明したい。2013 年 6 月に行われた資料の保全作業時のメモより、校舎の各場所にあった部屋や備わっていた機能を表 1 に示す。

1 階には下足室（住民用昇降口）と居室、保健室、渡り廊下があった。2 階には役場機能が集中していたが、居室もあった。3～5 階の部屋は主に居室として使用されていたが、3 階に団らん室、4 階に調理室、5 階に図書室といったように各階に居室でない部屋もあった。一方、1 階の渡り廊下は第 1, 2 体育館や生徒ホールに繋がっていた。特に第 2 体育館は物

資保管場所として使用されていた。また、生徒ホール1階には食堂と売店があり、弁当販売が行われていた。このような校舎全体における公共スペースは主に1,2階、第1,2体育館と生徒ホールだった。

上記のような形態で成り立っていた旧騎西高校から保全された資料について、保存箱の総数は174個確認されている(2013/10/15時点)。箱により入っている資料点数は一点から十数点とばらつきがあるため、資料の総数として確かな数字は不明である。そのため、数百から数千あると考えられる。

資料の種類としては、役場資料(公文書)や、廊下の壁や掲示板などに貼られていた掲示物(役場や政府からのお知らせ、周辺地域の地図や交通情報、イベント情報など)、国内外のあらゆる所から贈られた支援品(千羽鶴、寄せ書き、横断幕、絵手紙など)、生活の中で使用されていた公共物(図書室の本、仮設更衣室、手作りのテーブルなど)などがある。

第3章 原状記録としての写真

第1節 現状写真を原状記録として

原状記録とは資料が元々あった場所や状況についての記録である。本章では原状記録として、2013年6月に撮影された双葉町役場埼玉支所及び旧騎西高校避難所の原状写真を用いた。²⁵

旧騎西高校避難所には最大で1,200人程度が居住していたが、仮設住宅への移住などにより住民が退居し、写真が撮影された当時の居住者は100人弱となっていた。居住者の減少に伴い居住スペースは1～3階とされ、4,5階はほぼ使用されなくなっていた。例外として4階の調理室で料理教室が開かれたり、5階の図書室がそのまま図書室として使用されたりといったことはあったものの、4,5階で居室として使用されていた部屋は空き部屋となった。さらに、居室として使われていた2階の会議室も既に使われなくなっていた。このため、保存されている写真には空き部屋もある。また、プライバシー保護の観点から居住空間は基本的に撮影されていない。ただし例外として、許可された2部屋程度の居住空間の写真は撮影できたと言われている。

上記のような環境と条件のもと撮影された写真の中でも、本研究では役場機能の集中していた校舎2階における掲示物についての写真を使用した。2階の各部屋は表1に示した通りであり、間取りは図3に示した。図の右側が北であり、左下、つまり南東の位置に玄関がある。この校舎の中で掲示スペースとして使用されていたのは基本的に壁と備え付けの掲示板であったが、少数ながら窓や、廊下に置かれたパーテーションなども使用されていた様子が写真から見て取れた。

原状写真は、写真2のようにまず校舎内を広く写した後に、写真3のように資料群全体を写し、写真4のように資料を個別に写す形式で撮影されている。写真2は校舎西側の廊下を北から撮影した様子である。それと同様に写真5のように校舎南側の廊下を西から撮影したものや、写真6の西側防火扉周辺の写真など、あらゆる方面から撮影された写真がある。このため、現地を知らない人間でも間取り図と写真からその場の様子を推測することが可能となる。

このように撮影された写真に写っている掲示物の1点1点を対象として、筆者が考案したデータ項目²⁶に多少の改変を加えたものを用いてデータを作成した。実際に用いた改変後のデータ項目を表2に示す。

写真から読み取った掲示物は合計268点だった。これを、部屋の名前や機能を参考にしつつ出所を基準に分類した。図4に示したこれを以後エリアと呼ぶ。なお、町長室と事務室の廊下がひとつのエリアに設定されているのは、部屋の境界が原状写真からでは判別できなかったためである。また、出納室の廊下には写真で確認できる限り掲示物が無かった。

²⁵ 第2章の第1節では現状写真と述べていたが、本研究を行うにあたり当写真は資料の元の状態を表す役目を担うため、あえて原状写真と表記している。

²⁶ 川浦, 2016, (卒業研究)。

エリアごとに掲示物を見る際、タイトルや本文から抽出した、或いは判断した内容を元に分類を行い、分析した。この分類方法の詳細は次節で説明する。

第2節 掲示物の内容分類

各エリアにおける掲示物の内容は表 3 の通りである。内容は主に掲示物のタイトルで判断した。このとき、タイトルで判断できない或いはタイトルが無いものについては、本文などの中身からキーワードを抽出したり総合的に判断したりといった操作をしている。例えば写真 7 の掲示物の場合、データ項目の「名称」は「埼玉県広域避難者交流会」で登録しているが、内容については後々の分析に用いる際の手間を軽減するため、「イベント情報」と設定している。

データを分析しやすくするために、表 3 に記した掲示物の内容について更に分類を行った。その分類法則を表 4 に示す。このとき、同じ単語以下の括弧内を削除したり、掲示物の内容をそれぞれ抽象化したりといった手続きを取った。具体例を以下に示す。

- 「外来者への案内」や「外来者への案内（報道関係者の入室拒否）」をまとめて「外来者向け」とした。
- 「周辺地域情報」や「交通案内」等を内容によりまとめて「校舎外関係」以下に含めた。
- 「裁判所案内」は、近隣の裁判所の場所について知らせるものであったため、「校舎外関係」以下の「周辺地域」に含めた。
- 「校舎案内」や「ごみ出し情報」も同様に「校舎内関係」以下にまとめた。
- 「節電の呼びかけ」や「クールビズのお知らせ」は双葉町役場が作成し掲示したものであり、校舎内の警備に関して記載されていた「警備」も役場から発信されたものであった。そのため、両者はまとめて「校舎内関係」以下の「役場から」にまとめた。
- 「保健衛生（感染症防止）」や「保健衛生（食中毒、感染症、手洗い、診療情報）」などは括弧内の内容に関わらず、まとめて「保健衛生」とした。
- 「雇用関係」も「保健衛生」と同様、括弧以下を削除し、まとめた。
- 外部機関からのお知らせの類はまとめて「広報」とした。
- 「健康相談等」や「法律相談」などは「相談窓口」としてまとめた。
- 「被災地のペット情報」は、その内容からボランティアの人々が作成したものであると判断できたため、ボランティアによる支援活動であるということで「被災者支援」に分類した。

以上の方法で掲示物の内容について分類を行った。ここで、上記に記載のない項目の処理については、既に説明した単語以下の括弧を削除、或いは内容の抽象化のいずれかの手法を取っている。

掲示物の内容を分類し、エリア毎の点数も付加した結果を表 5 に示す。このとき、校舎

外関係と校舎内関係についてのみ、それぞれのセルに具体的な内容を記す形式をとった。というのも、校舎外関係と校舎内関係の 2 種類については、他の項目と異なり校舎内各所に同じ情報が掲示されている例が多く見られたためである。例えば、写真 8 の校舎 1, 2 階平面図は、複数の掲示板に同じものが貼られていた。

第3節 写真を用いた分析と考察

表 5 より、「外来者向け」の情報は、玄関と東電・経産省のエリアに多くあり、他には議会事務局エリアに 1 点あるだけだった。ちなみにこのエリアというのは、写真 9 に見える外階段を上り、写真 10 の入り口を入ったところにある。入り口を入れてすぐ左手を見ると、写真 11 に写っているように受付窓口が見られたようである。写真 11 の右半分、中央辺りを拡大すると写真 12 に示した掲示物が見られる。これには各種受付を役場事務室で行っている旨のことが書かれている。これらのことから、玄関を外来者用の窓口として使用するとともに、外来者が真っ直ぐ建物奥の町役場事務室へ向かうよう促していたことがうかがえる。

町長室・事務室エリアには「外来者向け」を除く情報が全種類揃っており、資料点数も 71 点と全エリアにおいて最多であった。とりわけ「住宅情報」と「雇用関係」の 2 種類については、写真 13、写真 14 で見られるように、廊下の壁にそれぞれ専用スペースが設けられていた。

玄関から東電・経産省と町長室・事務室を通る秘書広報課までのエリアを合わせると、「外来者向け」、「校舎外関係（周辺地域、交通、イベント、新聞）」、「校舎内関係（校舎案内、役場からのお知らせ、ごみ出し情報）」、「保健衛生」、「雇用関係」、「住宅情報」、「広報」、「相談窓口」、「被災者支援」の、1 種類を除く全種類の情報が揃っていたと言える。資料点数も合計 135 点となり、校舎 2 階の掲示物の約半数が玄関付近に掲示されていたことがうかがえる。このことから、玄関近辺に行くことで少なくとも校舎 2 階における掲示物の大部分を確認できる状態であったのではないかと考えられる。ただし、上記で除くとした情報の 1 種類というのは校舎内関係（施設使用方法）であり、その内容は「流し場の使い方」であるため、玄関に無いのは当然とも言えよう。

進路資料室の廊下に置かれた長机には、写真 15 のように「雇用関係」の資料が集中しており、ハローワークとしての役割を果たしていた。また、進路資料室の扉には雇用相談室が校舎 4 階に移動した旨のお知らせが掲示されていた。このことから、以前の進路資料室が雇用相談室として使用されていたことがうかがえる。そして、雇用相談室が別階へ移動したことを把握していない人々のために、資料とお知らせを設置し続けていたのではないかと考えられる。

東西にはそれぞれ掲示板、防火扉、流し場、階段といった共通の設備があり、その掲示物の中には同一のものも見られた。これは東西で階段や流し場の利用者がそれぞれ異なると役場が考え、あえて同一の情報を掲示していた可能性がある。

だがその一方で、西側トイレ・掲示板、流し場には見られた写真 16 のような「住宅情報」が東側には無く、西側でトイレ・掲示板にあるだけの写真 17 のような「広報」が東側では廊下、町役場職員居室廊下、防火扉周辺など広範囲に見られるなどの差も見られた。写真 18 のような「相談窓口」は西側なら防火扉周辺と流し場だが、東側では廊下と町役場職員居室、掲示板、トイレといったように、東側の方が広範囲に掲示されている。それでありながら西側の総資料点数が 48 点、東側の総資料点数が 44 点と、資料点数に大きな差は見られない。

補足すると、1 階における原子力対策室部分が、物資保管場所であった第 2 体育館への渡り廊下に繋がる場所であり、同じく 1 階における町役場事務室部分は第 1 体育館への渡り廊下に繋がる場所であった。また既に記した通り、玄関付近には 2 階における掲示物の大部分が集中していた。以上のことを踏まえると、東側の階段は玄関付近の情報を見るときに利用され、西側の階段は第 1, 2 体育館へ向かう際に利用されていたなど、東西で階段を利用する人や、その目的が異なっていた可能性など、差異の要因となりうる、あらゆる可能性を考えることができる。

玄関と西側トイレ・掲示板、東側トイレにノロウイルスの注意や対処法が計 3 点掲示され、また玄関と町役場事務室廊下、町役場職員居室廊下にクールビズのお知らせが計 3 点掲示されていた。西側防火扉周辺には「春の火災予防運動」というポスターも 1 点見られた。その一方で西側流し場にのみインフルエンザ予防の呼びかけが 2 点掲示されていた。また、教育委員会エリアの廊下にはゴミ箱があるのだが、ゴミ箱から少し離れた壁に掲示されていたごみの捨て方に関する掲示物（ごみ出し情報）の内の 1 点は大部分が寄せ書きに隠されており、下部が少し見えるだけであった（写真 19）。その付近では、壁に掲示物があるものの、前に段ボールが積まれておりその内容がわからない状態となっているものも 1 点見られた（写真 20）。

原状記録写真が 6 月に撮影されたために、ノロウイルスの注意やクールビズのお知らせといった情報が各所に掲示されていたものと推察できる一方で、インフルエンザ予防の呼びかけが 1 か所にのみ掲示されていた。他にも、不要になった掲示物を処分せずに放置していた、或いは上に異なる情報を貼り重ねていた状況が写真で確認できた。これは、不要になった掲示物を処分できない理由があったか、もしくは処分する必要が無かったなど、当時の状況を推測する材料となり得る。

先ほども取り上げた教育委員会廊下のごみ箱だが、教育委員会と町役場事務室エリアを含む校舎西側にごみ出し情報が集中していた。特にゴミ箱付近にはごみの捨て方、分別の仕方などの掲示物が複数見られた（写真 21）。また、東西どちらの流し場にも写真 22 に示した「流し場の扱い方について」という掲示物が見られた。これより、場所の用途に応じた情報の掲示をしていたと推測できる。

第4節 小括

本章では原状記録として写真を用いて、写真から読み取る形で掲示物のデータ作成と分

析を行った。その結果として、2階における掲示物の約半数が玄関近辺に集中していたことであるとか、建物上の構造も掲示物の点数も近しいにも関わらず場所により内容に差異が見られることや、不要となったものが処分されていない場合があるといったように、資料の原状の傾向や特徴などを見ることができた。場所の特性に応じた情報があり、その他のエリアには同一の情報が無いといった事象も見られた。

このように、原状記録として写真を用いることで、資料の元の状態における傾向や特徴などをうかがい知ることができた。更にはそこから、資料の利用目的や、利用されていたか放置されていたかなど、記録の利用に関することを推測することができると言える。

第4章 現物資料としての千羽鶴

第1節 保全された千羽鶴

現物資料とはその名の通り災害の記録そのものを指す。本章では現物資料として、2013年6月に保全された双葉町役場埼玉支所及び旧騎西高校避難所の資料を扱った。保全活動によって校舎にあった全ての資料が保全された訳ではなく、手違いなどにより処分されたものや、退居する住民が何らかの理由で持ち去ったものもある。このような理由から、資料保全の前にあらかじめ撮影された写真には写っているものの、保全することができなかった資料というものが存在する。

このような条件のもとで保全された資料の中から、支援品として国内外の各地から当避難所に贈られた千羽鶴を使用した。支援品とは激励の品や慰問品とも呼ぶことができ、災害時に被災地へ贈られた品を指す。支援品として当避難所に贈られた品は寄せ書きや横断幕、折り紙作品など多種多様であったが、見舞いや慰問に用いられることが多い千羽鶴を取り上げることとした。

ここでいう千羽鶴というのは、紙で作られた複数の折鶴を糸に通し、それ束ねたものであり、一般に写真23のような外観をしている。このとき、複数の折鶴により上記の形態を取ってさえいれば、折り鶴に使われている紙の種類や折鶴の数は問わないこととする。以上に示した定義のもと、70点の千羽鶴を対象に筆者が以前作成したデータ²⁷を用いて改めて分析を行った。

分析の際には、メッセージの位置、材質、作成地と作成者、数量の4点に着目した。

(1). メッセージの位置

メッセージというのは写真24や写真25のように、メッセージカード等が意図で括られているものや、写真26に見られる通り折鶴の羽などに文字を書き込む形で千羽鶴に添えられたコメントのことである。その内容としては、「「応援しています」「復興を祈っています」「頑張ってください」「絆」といった応援や励ましの言葉と、「双葉町」「ふた葉町」という町名」²⁸などが挙げられる。この有無と、ある場合はその位置を調査した。

(2). 材質

ここでいう材質とは、折鶴に使われている紙の種類を指す。

(3). 数量

数量というのは、1点の千羽鶴に連なる折鶴の数のことである。ただし、すべての千羽鶴につき厳密に数を数えたわけではないことに注意したい。千羽鶴をいくつか並べた際にシルエットが似ているものどうしや、各糸で繋がれた折鶴の数が一定であり折鶴の数を概算しやすいものについてのみ、数量を調べた。

(4). 作成地と作成者

²⁷ 川浦, 2016, (卒業研究).

²⁸ 川浦, 2016, p. 15.

作成地とは、作成された場所や送り主の所在地などを指す。これについてはメッセージに含まれる地名の記載を元に分類を行った。作成者は、メッセージから読み取れた個人や団体を指し、これにはボランティア団体や企業、学校、市町村なども含む。

4つの観点からの分析を終えたのち、第3章でも用いた原状記録写真と千羽鶴とを併せて分析を行った。写真の撮影方式などは基本的に第3章で説明したものと同様であるが、千羽鶴を確認できる原状記録写真には具体的に写真27のようなものがある。

第2節 項目による千羽鶴の分析と考察

まずはメッセージの位置について述べる。調査したところ、全70点中39点にメッセージが書かれていた。その中でもメッセージが書かれている位置について調べると、鶴の羽に書かれているものが20点、メッセージカードや短冊のような紙など（以下、簡略化のため、単にカードと記す）に書かれているものが25点あり、その中には鶴の羽に書かれていて且つカードも添えられているものが9点あった。この鶴の羽に書かれているという判定について、基本的には羽の表或いは裏に書かれているが、折る前の紙にメッセージが書かれそのまま折り込まれているものも数点見られた。これらは総じて鶴の羽として扱うこととした。よって、鶴の羽にのみ書かれているものが11点、カードに書かれているものが16点、鶴の羽とカードの両方に書かれているものが9点、その他の部分に書かれているものが3点あることがわかった。

次に、同じくを元に材質について述べる。これについて分類したところ、無地の折り紙で折られた折鶴からのみ成る千羽鶴が47点、柄入りの折り紙で折られた折鶴からのみ成るものが5点、無地の折り紙で折られたものと柄入りの折り紙で折られたものが混在するものが13点、その他の紙で折られたものが5点見られた。例えば写真23は無地の折り紙で折られた折鶴からのみ成る千羽鶴である。一方柄入りの折り紙には千代紙のようなものやキャラクターのイラストが入ったデザインのものなどがあった。その他の紙というのは写真28のように折り紙でない紙を指している。一部を拡大した写真29をよく見ると広告紙や、ノートのような罫線の入った紙が使用されていることがわかる。他にも新聞紙や包装紙などで折られたものもあり、このように折り紙でないものは総じてその他と分類した。

続いてについて説明する。メッセージが書かれているものから作成地を調べたところ、地名の記載が読み取れたものは22点あった。それぞれ東京都からのものが3点、埼玉県から5点、山梨県から3点、京都府から6点、大分県から1点、佐賀県から1点、アメリカ合衆国から1点、スペインから1点、ベトナムから1点であった。

表には記載していないが、作成地が判明したものの中でも作成者について述べる。山梨県からの3点は、甲斐市立双葉東小学校、甲斐市立双葉西小学校、甲斐市立双葉中学校の3校からそれぞれ来ていることから、双葉町と同じ「双葉」の名が作成者に入っていることがわかった。また京都府からの6点の内5点は、双葉町の姉妹都市である京丹波町の小学校や

教育委員会から届いたものであった。佐賀県からの 1 点はふたば幼稚園・保育園から贈られたものであることが読み取れ、これも「ふたば」の名が作成者に入っているといえるだろう。アメリカ合衆国からの 1 点は Santa Barbara City College の学生たちが作成したものであるが、その代表が双葉町の出身者であることをメッセージから読み取ることができた。

また、数量について分析した結果、折鶴を 1,000 羽数えて折られていたものは 19 点あることがわかった。

以上、項目別に見てきた結果を統合させたものを表 6 及び表 7 に示し、まずは表 6 について説明する。

無地の折り紙で作られた 47 点にはメッセージが書かれているものが 29 点あり、その位置はそれぞれ、鶴の羽が 5 点、カードが 14 点、鶴の羽とカードの両方が 8 点、その他の部分が 2 点であった。無地で折られた 47 点の中で作成地が明らかになったものは 17 点あり、また 1,000 羽数えて折られたものは 14 点あった。

柄入りの折り紙で作られた 5 点にメッセージが書かれているものと作成地が明らかになったものはいずれもなかったが、1,000 羽数えて折られたものは 2 点見られた。

無地の折り紙と柄入りの折り紙が混在する 13 点には、メッセージが書かれているものが 7 点あった。メッセージの位置はそれぞれ、鶴の羽が 3 点、カードが 2 点、鶴の羽とカードの両方が 1 点、その他の部分が 1 点であった。13 点の中で作成地が明らかになったものは 4 点あり、また 1,000 羽数えて折られたものは 3 点確認できた。

折り紙でない素材で折られているその他の 5 点については、メッセージが書かれているものが 3 点あり、その位置はすべて鶴の羽であった。作成地が明らかになったものは 1 点あったが、1,000 羽数えて折られたものはなかった。

これらを総合してみると、全 70 点のうち、メッセージが書かれているものが 39 点、1,000 羽数えて折られたものが 19 点、作成地が判明したものが 22 点あった。また、メッセージが書かれている 39 点において、メッセージ位置の内訳は鶴の羽が 11、カード 16、鶴の羽とカードの両方 9、その他が 3 であった。さらにその 39 点において、半数以上の 29 点が無地の折り紙で折られていた。

以上よりメッセージと材質の関係に着目すると、無地の折り紙でのみから作られた千羽鶴には、その半数以上にメッセージが書かれていることがわかった。それに対して柄入りの折り紙のみから作られた千羽鶴には、メッセージが書かれたものが 1 点も無かった。しかしながら、無地の折り紙と柄入りの折り紙が混在しているものにはメッセージが書かれていた。折り紙でないその他の素材からなる千羽鶴でメッセージが書かれているものの場合、そのメッセージは鶴の羽にのみ書かれており、カードなどといったメッセージを付するためのものを添えている例はなかった。総合的に見て、無地の折り紙からなる千羽鶴ほどメッセージが付されている割合が高く、またその位置はカードであることが多いと言える。これらのことから、折り鶴に使う材質によりメッセージの有無が左右されている、或いはメッセージの有無により材質が選択されている可能性が考えられる。

続いて折鶴を 1,000 羽数えて折られていたもの 19 点について見ると、材質はそれぞれ、無地の折り紙で折られたものが 14 点、柄入りの折り紙で折られたものが 2 点、無地の折り紙と柄入りの折り紙が混在するものが 3 点あった。このことから、1,000 羽数えられているものは無地の折り紙で折られる傾向にあると考えられる。また、作成地が判明したものについても 22 点中 17 点が無地の折り紙のみから作られていた。ただし、作成地はメッセージから読み取ったものであるため、無地の折り紙からなる千羽鶴にメッセージが書かれている割合が高いことが要因である可能性に注意しなければならない。

しかしながら 1,000 羽数えられているというのは、ちょうど 1,000 羽になるよう計画的に作成されたことを表していると言える。また作成地がわかるというのは、支援しようと考えている自分の存在や所在をあえて相手に知らせようとしたと捉えることが可能である。よって、計画的な作成や支援の意思表示と折鶴の材質との間には何かしらの関係があるようである。

次に表 7 について述べる。まず、東京都で作成された 3 点にメッセージが書かれているものはなく、材質は無地の折り紙のみであった。1,000 羽数えて折られたものは 2 点見られた。埼玉県からの 5 点にはメッセージが書かれているものが 4 点あり、その位置はカードが 3 点、鶴の羽とカードの両方が 1 点であった。メッセージがカードに書かれていた 3 点は無地の折り紙で折られており、更にその内の 1 点は 1,000 羽数えて折られていた。鶴の羽とカードの両方に書かれていた 1 点は無地の折り紙と柄入りの折り紙が混在していた。メッセージが書かれていなかった 1 点は無地の折り紙で折られていた。念のため補足しておく、埼玉県は旧騎西高校の所在地である。

山梨県からのものは 3 点すべてにメッセージが書かれており、その位置は鶴の羽とカードの両方であった。また 3 点すべて、その材質は無地の折り紙であった。京都府からの 6 点はそのすべてにメッセージが書かれており、その箇所はそれぞれ、鶴の羽が 1 点、カードが 1 点、鶴の羽とカードの両方が 4 点という分類となった。6 点いずれも無地の折り紙で折られていた。メッセージがカードに書かれていた 1 点と、鶴の羽とカードの両方に書かれていた 4 点の内の 1 点、計 2 点が 1,000 羽数えて折られていた。これら 3 点というのはそれぞれ、山梨県甲斐市立双葉東、西小学校、甲斐市立双葉中学校から贈られたものであった。

大分県からの 1 点はカードにメッセージが書かれており、材質は無地の折り紙であった。佐賀県からの 1 点にはメッセージがその他の位置に書かれており、無地の折り紙と柄入りの折り紙が混在した状態で 1,000 羽数えて折られていた。この 1 点は佐賀県ふたば幼稚園・保育園からのものであった。

アメリカ合衆国からの 1 点とスペインからの 1 点はともに、カードにメッセージが書かれており、材質は無地の折り紙と柄入りの折り紙が混在したものである。ベトナムからの 1 点はメッセージが鶴の羽に書かれており、折り紙と折り紙でないものが混在しているため材質はその他である。

京都府からの 6 点は全点が無地の折り紙で折られており、その内 2 点は 1,000 羽数えて

折られていた。6 点中 5 点は双葉町の姉妹都市である京都府京丹波町からのものだ。また、鶴の羽とカードの両方にメッセージが書かれていたものが 6 点中 4 点あるが、その 4 点の内 3 点は京都府京丹波町教育委員会・社会教育委員会からのものだった。

上記より、作成地と作成者については旧騎西高校の所在地であった埼玉県と「双葉町の姉妹都市である京丹波町がある京都府」²⁹、そして町名と同じ名前が入った団体（学校等）などが支援の意思表示をする傾向にあると考えられる。

以下は、表には表さなかったが分析の中でわかったことである。

折鶴を 1,000 羽数えて折られていたもので作成地及び作成者が明らかになったものは 6 点あり、東京都の個人からのものが 2 点、埼玉県のサークルから 1 点、京都府の町教育委員会と小学校の PTA から各 1 点の計 2 点、佐賀県の幼稚園・保育園から 1 点であった。その 6 点のメッセージ位置は、鶴の羽が 2 点、カードが 1 点、鶴の羽とカードの両方が 1 点、その他が 2 点という分類であった。

1,000 羽数えて折られていたものの中には鶴の羽に小さく数字が書かれているものや、幼稚園児が 1 人で作成した旨のメッセージが添えられているものがあつた。また、複数名で作成したことが明らかな千羽鶴を見ると、鉛筆やマジック、ボールペンなど様々な筆記用具でメッセージが書かれている様子も見られた。

第3節 出所による千羽鶴の分析と考察

原状記録写真と現物資料とを照合し、出所を確認できたものは全 70 点中 55 だった。詳細は表 8 に示す。しかしながら保存箱などに記載されている文字としての出所情報（保全作業や整理作業の際に記載されたもの）と写真とで出所が異なるものが 8 点あつた。写真撮影から保全までの間に資料が移動したか、保全時や整理時のミスであると考えられるが、今回は写真で確認できた場所の情報を採用し、分析に使用した。

表 8 より、写真にて確認できた千羽鶴 55 点の内 15 点が秘書広報課の室内にあつた。また、55 点の内 18 点は秘書広報課の廊下にあつた。これら 2 つを併せると、写真で確認できた 55 点の内 33 点という半数以上が秘書広報課の室内外にあつたと言える。またこれは、千羽鶴全 70 点中で見ても約半数であるため、双葉町に送られた千羽鶴の約半数が秘書広報課の室内外に飾られていたと見ることができる。

写真で確認できた 55 点の内 18 点は作成地が判明しているものであつた。これを表 9 に示す。その 18 点の内 8 点は秘書広報課の廊下にあつた。また、18 点中 4 点が京都府からのものであり、その全てが秘書広報課の廊下に飾られていた。18 点中 3 点は海外から贈られたものであり、全て秘書広報課の廊下に飾られていた。また補足として、千羽鶴全 70 点中で作成地が判明しているものは 22 点である。つまり、22 点中 18 点が写真で確認できたということになる。これより、作成地がわかるもの、つまり送り主を把握できるもの或いは

29 川浦, 2016, p. 18.

把握しているものを秘書広報課の廊下に飾る傾向があったと考えられる。

第4節 小括

本章では現物資料として千羽鶴を用いてデータ分析を行った。その結果として、作成における計画性や、支援の意思表示をする人の傾向などがわかった。特に、被災者避難先の近隣地域と被災地の姉妹都市、そして被災地と同じ名前の団体から千羽鶴が贈られていたといったように、作成地・作成者や作成における傾向・特徴などを見ることができた。

更にそこに原状についての情報を加えることで、千羽鶴が秘書広報課の廊下に集中していたことが明らかになった。ここで、第3章で原状記録を元に分析した結果として玄関～秘書広報課の廊下に掲示物が集中していたことを併せて考えると、人々がこの玄関～秘書広報課の廊下に来ることで多くの（校舎2階におけるほぼ全種類の）情報が得られる状態であったと推測できる。つまりここは、避難所の内外を問わず、避難所住民や既に退居した町民、その他外来者といったあらゆる人々が集まる場所だったと推察することが可能である。

このように、現物資料を分析することで資料の作成に関することを推測できるようになり、そこに場所の情報を加えることでその場所の特徴などまで推測することが可能になり得ると言える。

第5章 記録と場所

第1節 結論

本研究では、記録に付加すべき情報を、場所や当時の記録の状態についての情報であると仮定し、原状記録と現物資料について記録分析を行った。特に、アーカイブズにおける三原則に則り、出所・原秩序・原形、つまり記録が存在していた場所・存在していたときの状況・存在していたときの形状といった、記録の元の状態を尊重した。

原状記録を元に分析した結果、記録が存在していた元の場所とその状態や目的、利用の仕方などといった、記録の利用に関することについて推測が可能になることがわかった。また、現物資料を分析した結果、記録の作成地・作成者や計画性の有無、支援の意思表示をする人の傾向など、記録の作成に関することが推察できるとわかった。そして原状記録と現物資料を併せて分析を行うことで、その記録についての作成から利用までのみならず、その記録が存在していた場所と人との関係についてまでも推測できたとと言える。

今回の結果より、災害の記録研究において原状記録と現物資料を用いることは、記録と場所の関係性を明らかにするにあたり有効であると言える。また記録の原状についての情報を解明することで、記録の作成から利用に関することを越えて、その記録について広く理解することが可能になると考えられる。

第2節 展望

本研究では、記録に情報を付加するに辺り、場所の情報が必要であるとの考えのもと記録研究を行った。しかしながら、記録に場所の情報を付加して変換した記憶資料の、記憶の想起に対する有効性の検証までは及ばなかった。今後、当事者の方々を対象とし、有効性の検証を行うことが必要である。

また今回は、揭示物と千羽鶴という限定された種類の資料を扱った。今後、他の種類の資料についても同様の分析を行うことで、当時の避難所生活を復元できる可能性もあると考えられる。最後に、災害の記録研究における方法論確立に向けて、更なる検討が必要である。

謝辞

本研究を進めるにあたりご指導ご鞭撻いただきました研究指導教員の白井哲哉先生、副研究指導教員の宇陀則彦先生にこの場を借りて深く感謝申し上げます。また、議論を通じてご助力いただいた研究室の皆様にも感謝申し上げます。そして、多くの暖かい激励をいただきました福島県双葉町の方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

図表

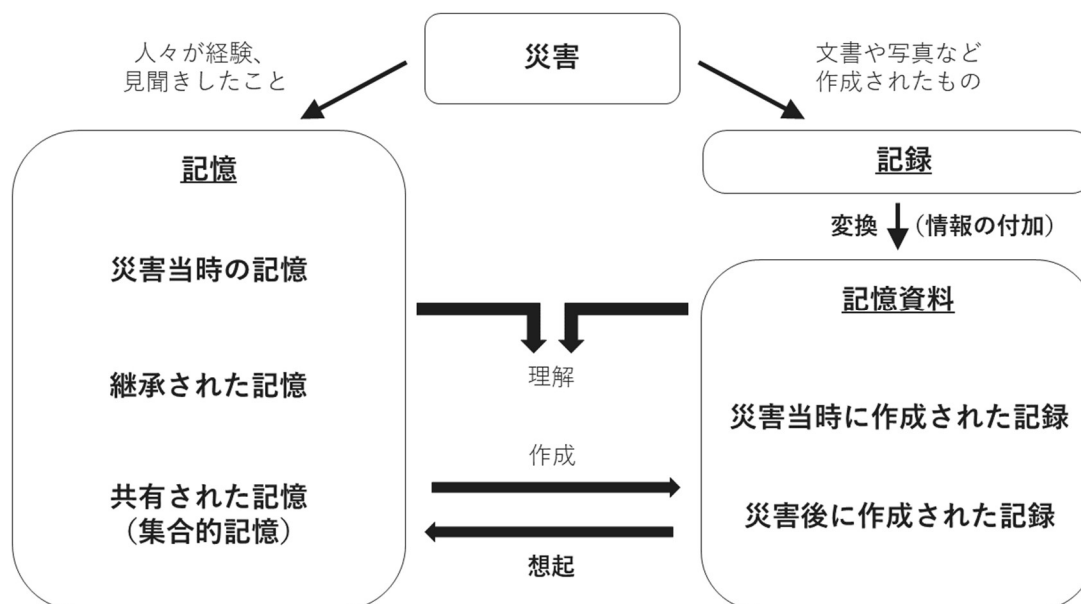


図 1 記憶と記録、記憶資料の関係図



図 2 双葉町の避難経緯



写真 1 旧埼玉県立騎西高校 校舎

表 1 旧埼玉県立騎西高校校舎の部屋や機能

場所	部屋、機能
1 階	下足室（住民用昇降口）、教室 A～H（居室）、 第 1 体育館へ繋がる渡り廊下、第 2 体育館と生徒ホールへつながる 渡り廊下（食堂・浴室、物干し場、バス乗降場へも）、 デイサービス、保健室・健康相談室、保健対応室（感染症対応室）
2 階	玄関、町役場職員居室、会議室（居室）、第 2 会議室、 社会科室、各役場機能（東電、経産省、町役場事務室、町長室、 秘書広報課、警備室、議会事務局、進路資料室、出納室、 教育委員会、原子力対策室）
3 階	教室 A～H（居室）、入所者（出所者含む）の団らん室、 町役場職員居室
4 階	教室 A～H（居室）、その他居室、調理室
5 階	居室、図書室、子供図書室、会議室
第 1 体育館	子育てルーム
第 2 体育館	物資保管場所
生徒ホール 1 階	食堂、売店（弁当販売）
生徒ホール 2 階	居室、浴室、洗濯室

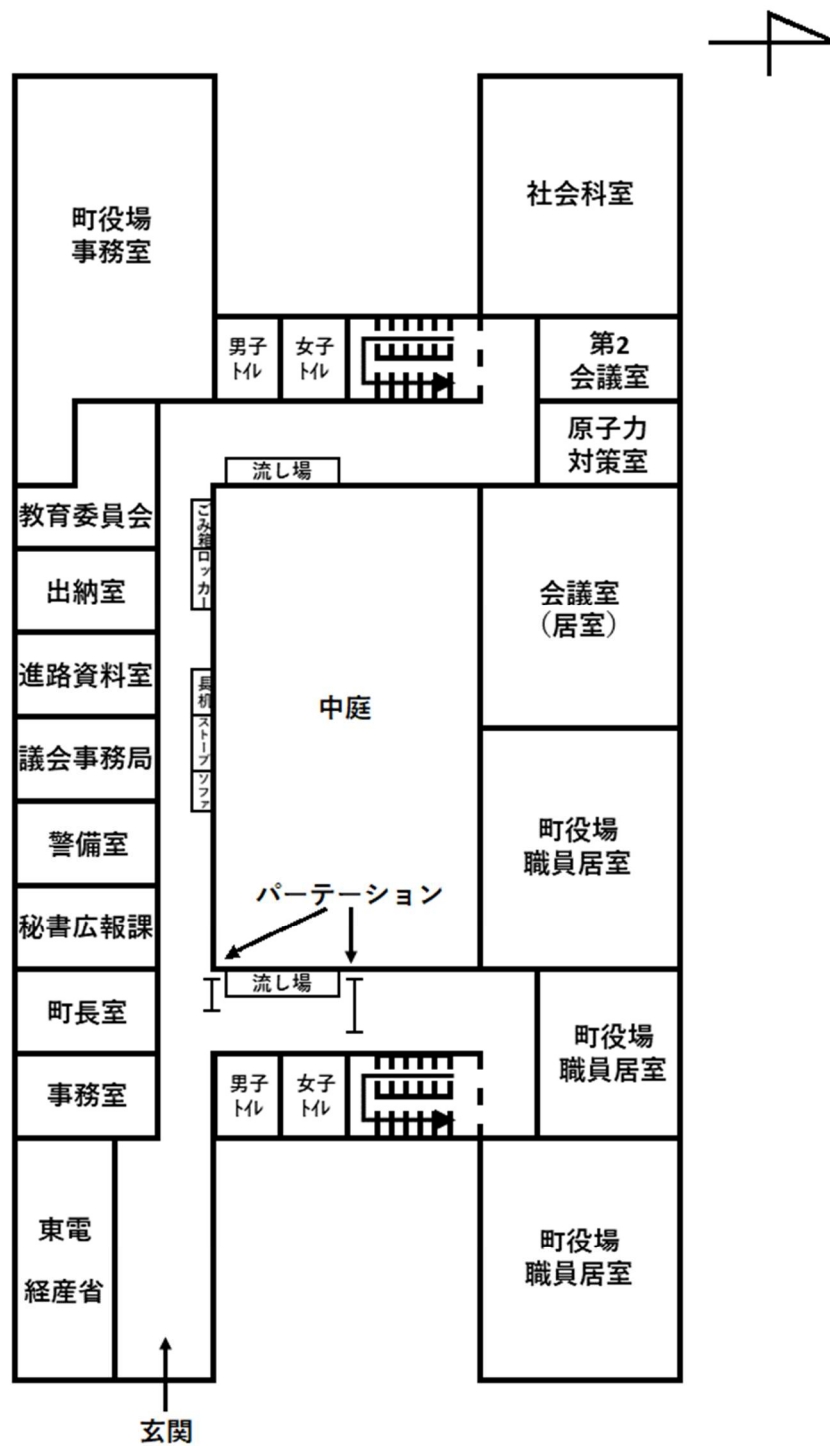


図 3 2階 平面図



写真 2 2階 西側廊下



写真 3 2階 西側掲示板

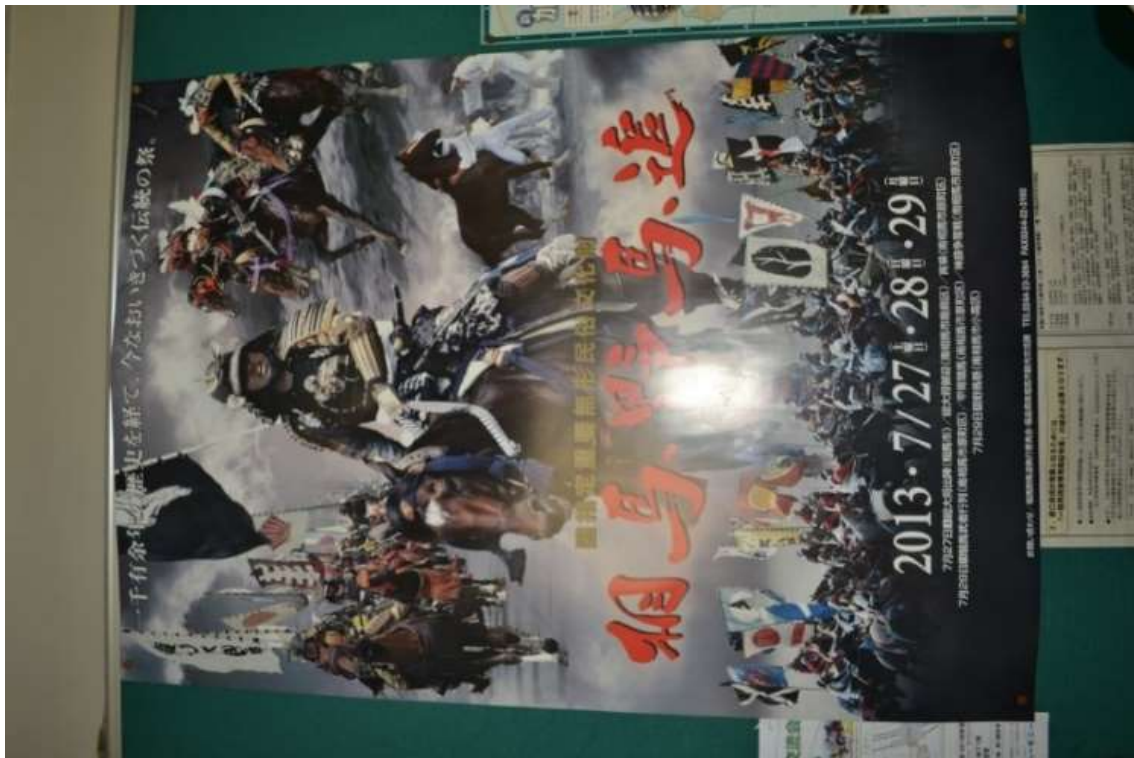


写真 4 2階 西側掲示板ポスター



写真 5 2階 南側廊下



写真 6 2階 西側防火扉周辺

表 2 データ項目

	項目	説明
1	整理番号	資料を識別する番号。
2	名称	資料の名称。
3	分類	資料の分類。(例：掲示物、千羽鶴、寄せ書き、など)
4	作成日時	資料の作成年月日。西暦。
5	作成地	資料の作成地。都道府県。海外なら国名。
6	作成者	資料の作成者。市町村や団体など。
7	受取人	資料の受取人。
8	出所	資料の出所。
9	数量	資料の数量。
10	寸法	資料の寸法。(縦×横)(cm)
11	形態	資料の物理的形態。
12	材質	資料の材料、材質。
13	関係	他の資料との関係。
14	写真	資料を撮影した写真の記号、番号。
15	備考	上記要素に該当しない情報。

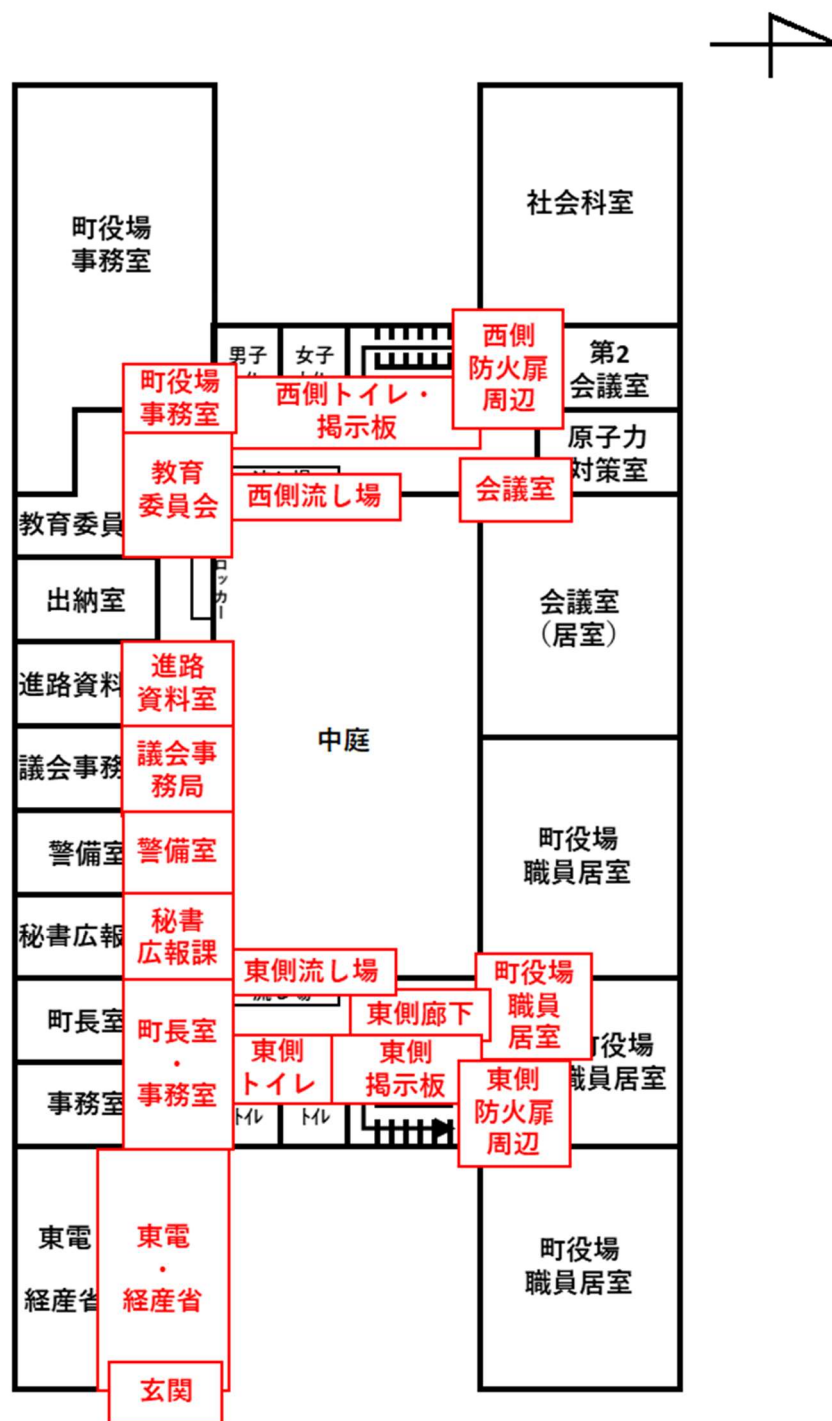


図 4 2階 エリア分類

表 3 各エリアにおける掲示物の内容

エリア	掲示物の内容
玄関	保健衛生（ノロウイルス）、クールビズのお知らせ、交通案内、イベント情報、外来者への案内、校舎案内（事務室の位置）
東電・経産省	校舎案内（平面図）、周辺地域情報（温泉、他）、外来者への案内、組合からの連絡、保健衛生（脱水予防、診療情報）、雇用関係（求人案内）、節電の呼びかけ、住宅情報（農業関係）、警察からのお知らせ、交通案内、加須西部販売所（取り扱い新聞、販売所移転のお知らせ、休刊日のお知らせ）
町長室・事務室	住宅情報（専用エリアあり）、雇用関係（求人案内）（専用エリアあり）、ごみ出し情報、被災地のペット情報、行政書士会無料相談のお知らせ、生命保険相談窓口の案内、イベント情報、校舎案内（保健室の位置）、節電の呼びかけ、広報（中国残留日本人孤児）、保健衛生（献血） 介護福祉（ホームヘルパー）
秘書広報課	周辺地域情報（温泉、病院、他）、広報（国民年金保険料の免除、福島災対本部）、交通案内、保健衛生（熱中症）、警備、NHK 放送受信料免除のお知らせ
警備室	周辺地域情報
議会事務局	外来者への案内（報道関係者の入室拒否）、被災者支援情報、中小企業・個人事業主への案内、裁判所案内
進路資料室	校舎案内（雇用相談室移動）、広報（労災補償、多重債務相談、業務改善助成金）、雇用関係（職業訓練、求人案内）、被災者支援情報（被災農業者）
教育委員会	マナーについての呼びかけ、イベント情報、ごみ出し情報、無料通信サービスについて
町役場事務室	警備、役場職員による宿直廃止のお知らせ、節電の呼びかけ、クールビズのお知らせ、警察からのお知らせ、ごみ出し情報
西側トイレ ・ 掲示板	文書の廃棄作業について、広報（国民年金基金の納付猶予のお知らせ）、イベント情報、保健衛生（ノロウイルス）、交通案内、周辺地域情報、住宅情報（高齢者専用）、医療機関での窓口負担免除等、校舎案内（平面図）、ごみ出し情報
西側防火扉周辺	周辺地域情報（図書館利用について、温泉、他）、イベント情報、被災者支援情報（県の施設無料入館の取組、支援ネット埼玉通信、救援物資の利活用について）、校舎案内（平面図）、火災予防運動、ごみ出し情報、国民年金の相談窓口

会議室	節電の呼びかけ、保健衛生（感染症防止）
西側流し場	保健衛生（手洗い、食中毒、インフルエンザ、腰痛予防、診療情報）、健康相談等、流し場の使い方、住宅情報（高齢者専用）
東側流し場	保健衛生（食中毒、感染症、手洗い、診療情報）、流し場の使い方
東側廊下	被災者支援情報（支援ネット埼玉通信）、校舎案内（雇用相談室移動）、施設バリアフリー化のための融資制度について、健康相談等、法律・生活相談
町役場職員居室	クールビズのお知らせ、広報（公正証書）、自動車税納税について、校舎案内（保健室の位置）、生命保険相談窓口の案内、子育て支援
東側防火扉周辺	イベント情報、周辺地域情報（図書館利用について、他）、自動車税納税について、節電の呼びかけ、被災者支援情報（定食開始）、校舎案内（平面図）
東側掲示板	校舎案内（平面図）、交通案内、周辺地域情報、法律相談 被災者支援情報（支援ネット埼玉通信、キッチンカー）
東側トイレ	イベント情報、保健衛生（ノロウイルス）、保険相談窓口



写真 7 イベント情報の掲示物

表 4 内容分類と掲示物の内容

掲示物の内容	内容分類	
外来者への案内（報道関係者の入室拒否、他）	外来者向け	
周辺地域情報（図書館利用について、温泉、病院、他） 裁判所案内 交通案内 イベント情報 加須西部販売所（取り扱い新聞、休刊日のお知らせ、販売所移転のお知らせ）	周辺地域 交通 イベント 新聞	校舎外関係
校舎案内（雇用相談室移動、事務室の位置、平面図、保健室の位置） クールビズのお知らせ 警備 節電の呼びかけ マナーについての呼びかけ 役場職員による宿直廃止のお知らせ 文書の廃棄作業について ごみ出し情報 流し場の使い方	校舎案内 役場から ごみ出し 施設使用方法	校舎内関係
保健衛生（手洗い、食中毒、感染症、インフルエンザ、ノロウイルス、腰痛予防、熱中症、脱水予防、献血、診療情報） 介護福祉（ホームヘルパー）	保健衛生	
雇用関係（職業訓練、求人案内） 中小企業・個人事業主への案内	雇用関係	
住宅情報（農業関係、高齢者専用）	住宅情報	
火災予防運動 広報（公正証書、国民年金基金の納付猶予のお知らせ、国民年金保険料の免除、福島災対本部、中国残留日本人孤児、労災補償、多重債務相談、業務改善助成金） 施設バリアフリー化のための融資制度について 自動車税納税について 組合からの連絡 警察からのお知らせ	広報	

無料通信サービス NHK 放送受信料免除のお知らせ 医療機関での窓口負担免除等 子育て支援	
行政書士会無料相談のお知らせ 健康相談等 国民年金の相談窓口 生命保険相談窓口の案内 生活相談 法律相談 保険相談窓口	相談窓口
被災者支援情報（県の施設無料入館の取組、支援ネット 埼玉通信、救援物資の利活用について、キッチンカー、 定食開始、被災農業者、他） 被災地のペット情報	被災者支援

表 5 各エリアにおける掲示物の点数と種類

エリア	資料 点数	内容分類								
		外 来 者 向 け	校舎外関 係	校舎内関係	保 健 衛 生	雇 用 関 係	住 宅 情 報	広 報	相 談 窓 口	被 災 者 支 援
玄関	6	○	交通 イベント	校舎案内 役場から						
東電・経産省	44	○	周辺地域 交通 新聞	校舎案内	○	○	○			
町長室・事務室	71		イベント	校舎案内 ごみ出し	○	○	○	○	○	○
秘書広報課	14		周辺地域 交通		○			○		
警備室	1		周辺地域							
議会事務局	5	○								○
進路資料室	14			校舎案内		○		○		○
教育委員会	15		イベント	ごみ出し						
町役場事務室	6			役場から ごみ出し						
西側トイレ・掲示板	16		周辺地域 交通 イベント	校舎案内 ごみ出し	○		○	○		○
西側防火扉周辺	16		周辺地域 イベント	校舎案内 ごみ出し					○	○
会議室	2			役場から	○					
西側流し場	14			施設使用方法	○		○		○	
東側流し場	5			施設使用方法	○					
東側廊下	6			校舎案内				○	○	○
町役場職員居室	3			校舎案内 役場から				○	○	
東側防火扉周辺	14		周辺地域 イベント	校舎案内 役場から				○		○

東側掲示板	9	周辺地域 交通	校舎案内					○	○
東側トイレ	7	イベント		○				○	

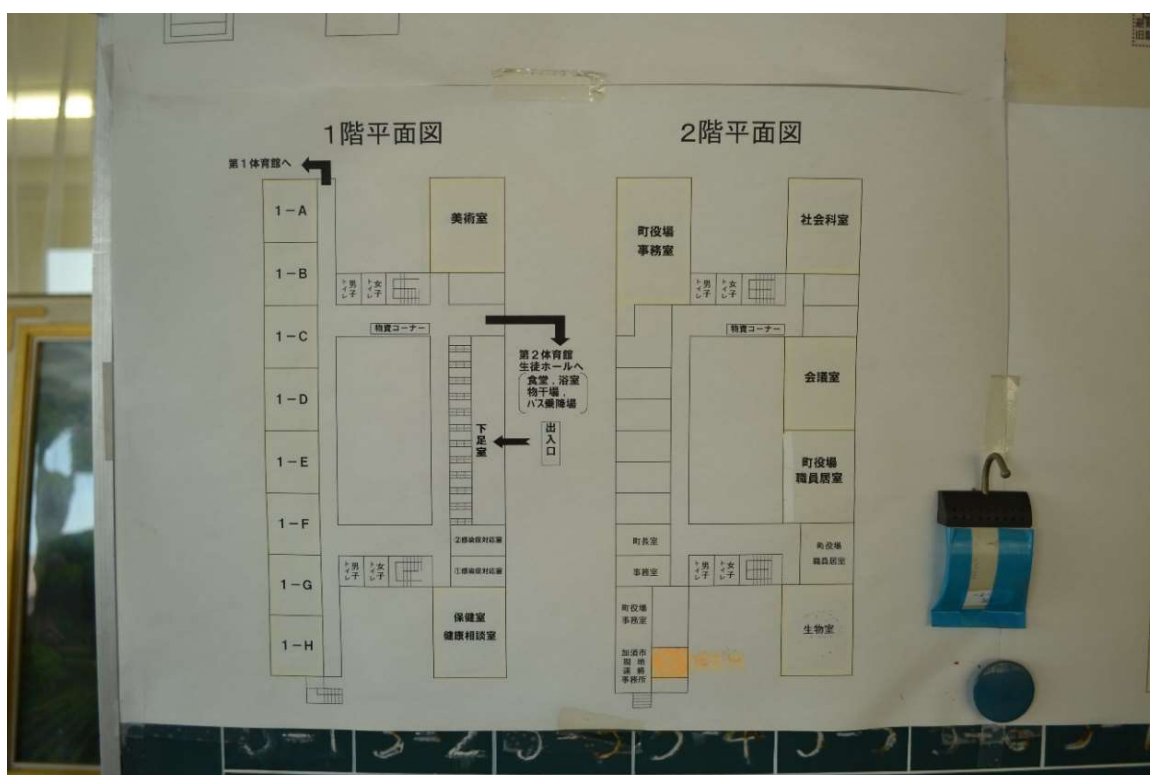


写真 8 校舎案内の掲示物（校舎平面図）



写真 9 2階 玄関 外観



写真 10 2階 玄関 入口



写真 11 2階 玄関 入ってすぐ左手

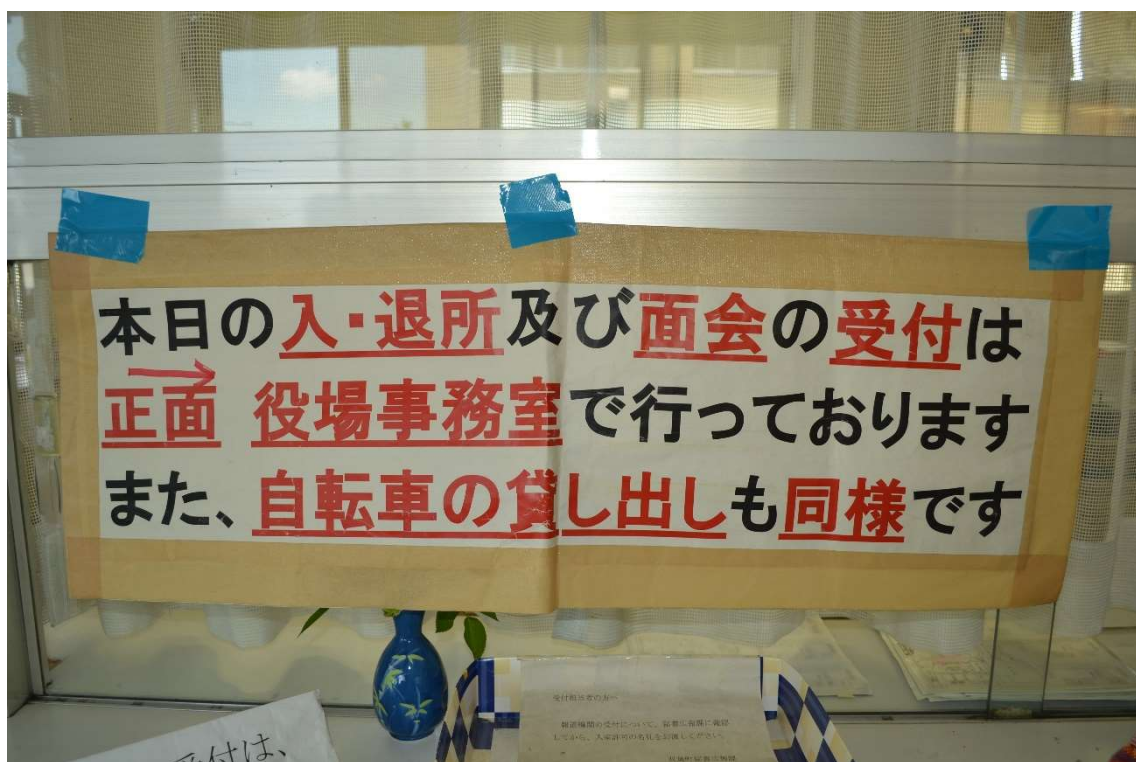


写真 12 外来者向けの掲示物



写真 13 2階 玄関－秘書広報課 廊下の壁 1



写真 14 2階 玄関－秘書広報課 廊下の壁 2



写真 15 2階 進路資料室 廊下

24時間 365日の安心

月額費用
入居一時金・敷金0円!!
家賃・共益費は—
月々90,000円

サービス

近隣施設

各種設備

入居案内

センチュリーシルバー花山

センチュリーシルバー花山

15(水)日

センチュリーシルバー花山

Century Silver Hanaoka

写真 16 2階 西側 住宅情報



写真 17 2階 東側 広報

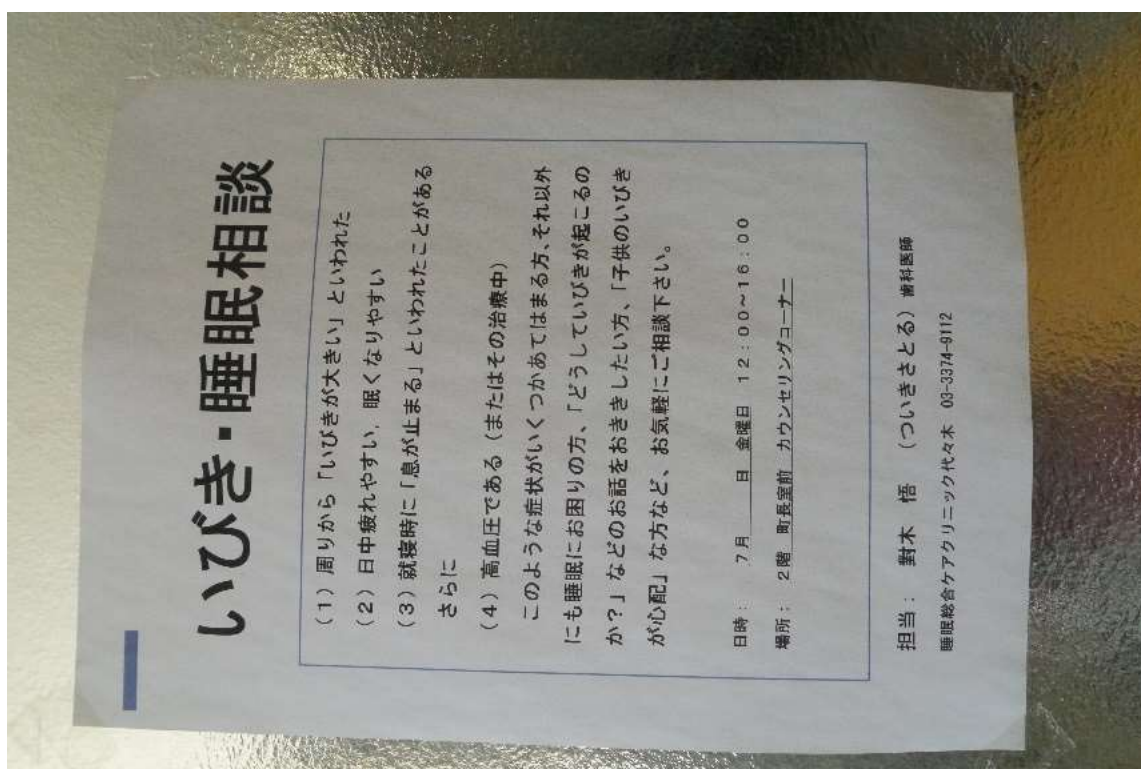


写真 18 2階 東側 相談窓口案内



写真 19 寄せ書きで隠れている掲示物



写真 20 段ボールで隠れている掲示物



写真 21 ごみ箱とその周辺



写真 22 施設使用方法「流し場の扱い方について」



写真 23 千羽鶴



写真 24 上にメッセージのある千羽鶴



写真 25 下にメッセージのある千羽鶴



写真 26 鶴の羽にメッセージのある千羽鶴



写真 27 千羽鶴の原状記録写真

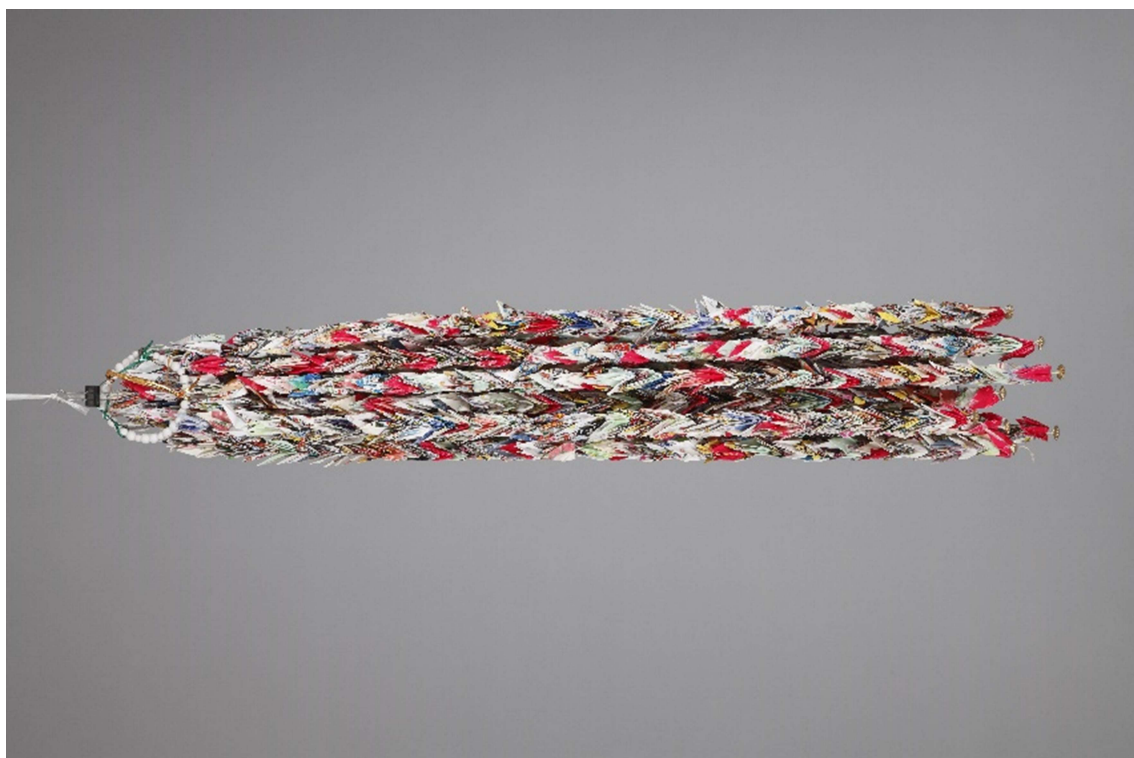


写真 28 折り紙でない紙で折られた千羽鶴



写真 29 折り紙でない紙で折られた千羽鶴 拡大

表 6 材質による千羽鶴の分類

材質	メッセージの位置					作成地が判明 したもの	1,000 羽	総数
	鶴の羽	カード	鶴の羽とカード	その他	計			
無地	5	14	8	2	29	17	14	47
柄	0	0	0	0	0	0	2	5
混在	3	2	1	1	7	4	3	13
その他	3	0	0	0	3	1	0	5
総数	11	16	9	3	39	22	19	70

表 7 作成地による千羽鶴の分類

作成地	メッセージの位置					材質				1,000 羽	総 数
	鶴の羽	カード	鶴の羽と カード	その他	計	無地	柄	混在	その他		
東京	0	0	0	0	0	3	0	0	0	2	3
埼玉	0	3	1	0	4	4	0	1	0	1	5
山梨	0	0	3	0	3	3	0	0	0	0	3
京都	1	1	4	0	6	6	0	0	0	2	6
大分	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1
佐賀	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	1
アメリカ	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1
スペイン	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1
ベトナム	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1
総数	2	7	8	1	16	17	0	4	1	6	22

表 8 千羽鶴の出所と点数

出所（写真）	出所（文字）	点数	写真と文字で 出所が異なる点数
町長室	町長室 秘書広報課	5	0
秘書広報課	秘書広報課	15	0
秘書広報課 廊下	秘書広報課 廊下	18	1
	秘書広報課		
警備室	2F 秘書広報課	2	2
	秘書広報課 廊下		
警備室 廊下	2F 秘書広報課	1	1
議会事務局 廊下	秘書広報課 廊下	1	1
教育委員会	教育委員会	2	0
教育委員会 廊下	教育委員会	7	0
町役場事務室	2F 教育委員会	1	1
生徒ホール	町長室 秘書広報課	2	2
第 2 体育館	体育館 2	1	0
総数		55	8

表 9 千羽鶴の出所と作成地

出所	作成地									合計
	東京	埼玉	山梨	京都	大分	佐賀	アメリカ	スペイン	ベトナム	
町長室	1	2								3
秘書広報課		1								1
秘書広報課 廊下	1			4			1	1	1	8
教育委員会 廊下		1			1	1				3
町役場事務室		1								1
生徒ホール			2							2
合計	2	5	2	4	1	1	1	1	1	18

参考文献

- [1] 佐々木 和子「第Ⅱ部 「地域歴史資料学」の広がり 第3章 現代資料論 ―震災アーカイブ構築をてがかりに―」『「地域歴史遺産」の可能性』2013, p. 207-224.
- [2] アン・ホワイトヘッド 「集合的記憶」『記憶をめぐる人文学』三村 尚央 訳, 2017, p. 169-209.
- [3] ミーガン・モリス 「同化を越えて―アボリジニ性／メディア・ヒストリー／パブリック・メモリー―」中條 献 訳, No. 8, 1998, p. 5-34.
- [4] 板垣 貴志「阪神・淡路大震災関連資料の利活用に向けて：災害資料研究領域の開拓」『災害・復興と資料』No. 3, 2014, p. 1-6.
- [5] 稲葉洋子 「阪神・淡路大震災と図書館活動：神戸大学「震災文庫」の挑戦」『人と情報を結ぶWE プロデュース』2005, p. 91.
- [6] 稲葉 洋子「神戸大学「震災文庫」の新たな役割 阪神地域と東北地域をつなぐ図書館員のネットワーク」『情報管理』Vol. 55, No. 6, 2012, p. 383-391.
- [7] 稲葉 洋子「震災記録のアーカイブの運用：「震災文庫」の経験から（特集 震災アーカイブ）」『情報の科学と技術 = The journal of Information Science and Technology Association』Vol. 64, No. 9, 2014, p. 371-376.
- [8] 高野 尚子「民と民をつなぐ震災資料：人と防災未来センター所蔵資料の事例から」『Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報』Vol. 1, 2009, p. 116-120.
- [9] 渡邊 隆弘「震災記録を収集・保存し、将来に役立てる：神戸大学「震災文庫」の10年」『図書館界』Vol. 57, No. 2, 2005, p. 73-77.
- [10] 水本 浩典「震災資料の保存と研究の必要性―なぜ、震災資料の蓄積が必要か―」『研究報告人文科学とコンピュータ (CH)』Vol. 2012, No. 8, 2012, p. 1-7.
- [11] 川内 淳史「「震災資料」保存の取り組みの現状と課題：阪神・淡路大震災から東日本大震災へ（特集 震災アーカイブ）」『情報の科学と技術 = The journal of Information Science and Technology Association』Vol. 64, No. 9, 2014, p. 377-381.
- [12] 田中 洋史「東日本大震災時の避難所における資料保全の取り組み：長岡市の場合」『災害・復興と資料』No. 1, 2012, p. 35-48.
- [13] 田中 洋史, 田中 祐子「新潟県長岡市における東日本大震災避難所史料の整理と研究：長岡ロングライフセンター福祉避難所を中心に」『災害・復興と資料』No. 3, 2014, p. 13-34.
- [14] 双葉町『双葉町復興まちづくり計画（第一次）』双葉町 いわき事務所 復興推進課 復興推進係, 2013, p. 135.
- [15] 双葉町『双葉町復興まちづくり計画（第二次）』双葉町 復興推進課, 2016, p. 106.
- [16] 水嶋英治「東アジアにおける日本植民地時代の表象文化に関する比較研究―物質文化研究の視点から―」『2015 年度 大学研究助成 アジア歴史研究報告書』2015, p. 131-

154.

- [17] 奥村 弘「なぜ地域歴史資料学を提起するのかー大規模災害と歴史学」『歴史文化を大災害から守るー地域歴史資料学の構築 奥村弘編』2014, p. 3-31.
- [18] ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会「ふくしま震災遺産保全プロジェクトこれまでの活動報告」2017, p. 21.
- [19] 川浦 瑞花「東日本大震災における支援品の研究ー福島県双葉町の事例からー」2016, (卒業研究).
- [20] マイケル・サンデル『マイケル・サンデル 大震災特別講義 私たちはどう生きるのか』NHK 出版, 2011, p. 63.
- [21] 吉野 高光「東日本大震災に係る避難所関係資料の保全について：双葉町役場埼玉支所及び旧騎西高校避難所の作業から」『災害・復興と資料』No. 3, 2014, p. 7-12.
- [22] 船橋 淳「フタバから遠く離れて NuclearNation」2012, 96 min.
- [23] 船橋 淳『フタバから遠く離れて 避難所からみた原発と日本社会』岩波書店, 2012, p. 202.
- [24] 白井哲哉「原子力災害被災地における民間アーカイブズ救出・保全の課題ー福島県双葉町における実践からー」『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』No. 14, 2018 (予定) .
- [25] 白井哲哉「大震災と双葉町の避難」『福島県双葉町の東日本大震災関係資料を将来へ残す』<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/futaba-archives/walk/> (2018-01-05).
- [26] 茨城史料ネット <http://ibarakishiryoku.web.fc2.com/> (2018-01-05).